『文学碑』をたずねて　その3

文学碑の良さは、訪ねるたびに名作にふれ、心を打たれることである。過去２回にわたって紹介してきた『文学碑』シリーズも今回が最終回。この間、紙面の関係上、いくつかを割愛したことを深くお詫びするとともに、多くの方からご教示頂いたことを深く感謝する次第である。

1　飾磨区

①西木冬子(馨)句碑その１（姫路市飾磨区山崎　亀山本徳寺西山廟所内）

姫路市飾磨区英賀出身で句集「冬帽子」「秋果の山」「花こぶし」などを著わすとともに、句会「竹柏」を主宰。歴史家としても著名で「英賀城史」「英賀城史(資料編)」などの著書を残した西木冬子(馨)の句碑。昭和57年5月に「竹柏俳句会」が創立10周年を記念して建立した。

『大切な　日がすぎてゆく　冬木立　冬子』

西木冬子句碑　その１

②西木冬子(馨)句碑その２（姫路市飾磨区英賀宮町　英賀神社内）

平成元年11月3日に「竹柏俳句会」が創立20周年を記念して建立した。

『瑞垣に　祥当祭の　灯明かな　冬子』

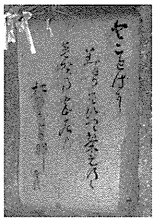
西木冬子句碑　その２

③木村重彦歌碑（姫路市飾磨区英賀宮町　英賀神社内）

英賀神社の宮司を勤める傍ら、歌人、郷土史家としても活躍した木村重彦の歌碑。昭和丙午の年(昭和41年)の春に英賀神社宮司木村百樹氏が建立した。

『とことはに みどりそひつつ 栄え行く 英賀の宮居の 松の色かな　重彦』

また英賀城関係史跡に西木冬子の句、木村重彦の和歌を刻んだ石碑が建てられている。


木村重彦歌碑

④梶子節句碑（姫路市飾磨区英賀宮町　英賀神社内）

昭和11年3月に英賀神社内の竹柏の木が天然記念物に指定されたことを示す兵庫県建立の石柱に刻まれた梶子節の句。

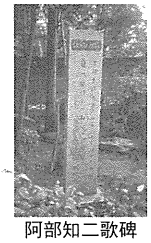
『萬葉の　頃の生ひ木や　春日満つ　子節』

梶子節句碑

⑤阿部知二歌碑（姫路市飾磨区英賀宮町　英賀神社内）

阿部知二は昭和16年に、日本製鉄広畑製鉄所（現新日鉄広畑製鉄所）の建設(昭和14年完成)などの開発で一変した英賀保一帯を訪問している。その体験が小説「煙雨」となった。小説のモデルになったのが開発から史跡を守ろうとした英賀神社の宮司であったといわれている。その「煙雨」の小説名に因んでつけられた「煙雨の庭」に建てられた歌碑。昭和50年10月の建立。

『とほき代の 夢みるごとし みやしろの 庭べに春の 雨はけぶりて　阿部知二』


阿部知二歌碑

⑥司馬遼太郎文学碑（姫路市飾磨区英賀宮町　英賀神社内）

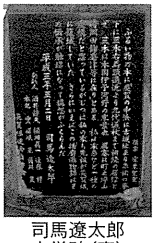
司馬遼太郎作「播磨灘物語」の文学碑。

表『播磨灘物語　司馬遼太郎』

裏『題字　安東聖空

ふるい物の本に「英賀の中浜に古城址あり赤松の幕下に三木右馬頭通近より九代通秋まで相続の居館とぞ、三木は本国伊予河野の末葉也。属塞は町之坪・山崎・岡田・飾磨津等に在り」とある。私は家系など一種の虚構だと思っているが、じつは私の家も先祖が英賀城に籠城していた。さらにいえばこの「播磨灘物語」はその伝承が触媒になって構想がふくらんだ。

司馬遼太郎
文学碑(表)


司馬遼太郎
文学碑(裏)

平成三年三月二日　司馬遼太郎

発起人　　酒井静夫　橘川真一　遠藤　博　本丸　實　嵯峨　晃　前川　豊

英賀保連合自治会』

⑦万葉集歌碑（姫路市家島町宮　家嶋神社内）

家嶋神社　万葉集歌碑と万葉歌碑

万葉集巻15　3718の歌碑。読人不詳。天平８年(736)新羅国に遣わされた使人が詠んだ歌で、「筑紫に廻り来りて海路京に入るに、播磨国家島に到れる時に作れる歌五首」の中の一首。書は万葉集研究家犬養孝。昭和61年７月に建立された。碑の前に平成13年11月吉日に建立された「万葉歌碑」の碑がある。

『遣新羅使人

伊敝之麻波　奈尓許曽安里家礼　宇奈波良乎　安我古非伎都流　伊毛母安良奈久尓　　孝書』

『万葉歌碑

いへしまは　なにこそありけれ　うなばらを　あがこひきつる　いももあらなくに

天平八年(七三六)夏六月大使阿倍継麿ら一行は予定よりかなり遅れて難波津を発った。七夕を九州で迎え秋も深まる頃ようやく対馬に寄港。

史の伝えるところでは新羅の地では歓待されることなく失意のうちに帰路につく。

更に旅の途中で大使を失い、副使も病を得て帰朝が遅れるという実りのない旅であった。

万葉集巻十五に往路の歌百四十首と帰路の歌五首が収められ、これは帰路の歌の冒頭にある。長い旅の中、片時も忘れることのなかった家と妻、その家という名を持つ家島にたどりついた安堵にさらに妻を恋しく思うのである。

この歌碑は昭和六十一年七月万葉学者犬養孝博士の揮毫を得て建立。

平成十三年十一月吉日』

2　花田・飾東地域

⑧岡本倶伎羅歌碑（姫路市飾東町八重畑・春日神社内）

飾東町八重畑出身で医師として勤務の傍ら、伊藤左千夫主宰誌「馬酔木（あしび）」派の歌人として活躍。正岡子規、伊藤左千夫、長塚節らと深い親交があった岡本倶伎羅の歌碑。生誕115年を記念して平成４年９月に建立された。

表『萬灯嶺ゆ　ふりさけ見れば　飾磨津や　家嶋の沖に　白帆浮くなり』

岡本倶伎羅歌碑（表）

同（裏）

裏『岡本倶伎羅　本名常増　父岡本瀧三郎　母河本氏せつの三男として明治十年二月三日飾東町八重畑に生まれ、明治四十年二月十日八重畑に没す。幼少より学を好み、郷土を後に遊学し、医業を修む。青年期神戸病院須磨療養所に入院静養中の正岡子規の治療に従事、人柄に感銘を深くす。後姫路病院に外科医員として勤務さらに神戸市雲井通に開業。すでに病痾に侵され自らホトトギスの異名「倶伎羅」と号し、病臥がちのつれづれを歌誌「馬酔木」に投稿、伊藤左千夫、長塚節らの注目するところとなり知遇を受く。同誌には島木赤彦、古泉千樫、斎藤茂吉らも寄稿。子規の遺風を継承す。明治三十八年夏播磨灘の家島に転地療養するも恢復を見ず三十年の生涯を閉ず、誌上に短歌七十五首写生文一編をとどむ、今ここに生誕百十五年を記念して歌碑を建立する。

平成四年九月吉日

建立者　岡本健男　河本孝蔵

文　　家島町真浦　金山敏美

揮毫　　福崎町山崎　大井流月』

⑨文学の小径句碑（姫路市飾東町佐良和　歳徳大明神）

佐良和に存在する歳徳大明神から大歳神社に到る山麓の小径に所狭しと30基余りの句碑（一部短歌）が立ち並んでいる。『青門俳句連盟「紫陽花会」「佐良和会」』同人が建立した。特に「紫陽花会」が平成９年に25基の句碑を建立し、「文学の小径」と名づけられた。このように数10基の碑が立ち並んでいる風景は大変めずらしい。

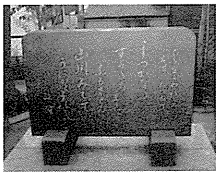
「文学の小径」の句碑の一部

3　御国野・別所・四郷地域

⑩天川政隆歌碑（姫路市御国野町御着　小寺大明神敷地内）

永正16年(1519)御着城(茶臼山城ともいわれている)を築城した小寺政隆の末裔天川政隆の歌碑。「播州御着城址建碑のうた」と題して詠んだ五首の内の一首。昭和41年４月に「天川城址、小寺城主之奥都城」の碑とともに建立された。裏には小寺氏とその末裔の経歴が刻まれている。

『ふるさとにわれらの古城をたづねて
　しづかなる すがたのままに ふるさとの 山川みえて かにかくうれし　政隆』

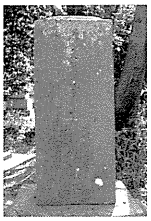

天川政隆歌碑

⑪小蓑塚句碑（姫路市継　船橋山山麓墓地内）

松尾芭蕉作「俳諧七部集」の一つである「猿蓑」所収の句碑。天保６年(1835)10月宇佐崎出身の俳人石田五芳とその門人によって建立された。五芳は晩年継村(現在姫路市継)に「笠舎(かさやど)」と称した庵を設けて住んでいた。その庭に父が増位山の風羅堂にあった松尾芭蕉の遺品の一つである蓑のおこぼれを貰い受けたものを埋め、小蓑塚と称した。その上に建てられていたのがこの句碑で、のちにこの地に移されたといわれている。

表『芭蕉翁　はつしぐれ　猿も小蓑を　ほしげなり』
裏『小蓑塚　天保六歲乙未之十月　石田五芳　同門人建立』

小蓑塚句碑
(表)


同(裏)

4　城陽・手柄・荒川地域

⑫稲畑汀子句碑（姫路市文化センター入口左花壇内塼碑）

文学碑ではないが、稲畑汀子の句『日の新樹　雨の新樹と　色重ね　汀子』が刻まれている。

稲畑汀子句碑

5　糸引・白浜・八木地域

⑬橋詰藤作句（姫路市東山　海久寺墓地内）

東山焼の職人であった橋詰藤作の墓に刻まれた辞世の句(二句)。

『逢ひ難き　世に来て花の　盛かな』
『招かれて　乗るや今宵の　月の船』

橋詰藤作墓誌句

橋詰栄歌碑

⑭橋詰栄歌碑（姫路市東山　東山焼作業場跡記念碑横）

昭和58年に建立された。東山焼作業場跡記念碑の横に建てられている。

『山すその　東山焼の窯跡に　碑は立ちにけり　往時しのばる
　　さかゑ』

6　的形・大塩地域

⑮湊神社歌碑その１（姫路市的形町的形　湊神社内）

万葉集巻７　1162　読人知らずの歌碑　昭和39年10月の建立。

『萬葉集之歌　まとがたの　湊及洲鳥
　　浪立てや　妻呼び立てゝ
　　邊に近づくも』

湊神社歌碑　その１

⑯湊神社歌碑その２（姫路市的形町的形　湊神社内）

赤松雪叟著「小夜枕」所収の和歌碑。昭和55年の建立。

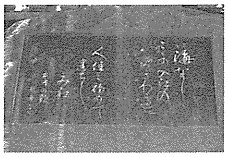
『ながめやる
　そのいにしへの　まとがたは
　神のかど出の　しるしとはしれ』

湊神社歌碑　その２

⑰湊神社歌碑その３（姫路市的形町的形　湊神社内）

昭和28年１月的形郷土志社発行「郷土志　21号」にみえる歌人藤原武市の歌碑。

『海なしゝ　こゝの入江の　みきわ辺に
　人住み初めて　建ちしみ社　武市の歌　孤舟かく』



湊神社歌碑　その３

7　大津区

⑱安積朗十方（ろじゅっぽう）句碑（姫路市大津区吉美　安積弘允宅内）

地元出身で句会「七草会」を主宰。句集「竹の春（３巻）」「草づくし」を刊行するとともに俳画にもすぐれた才能を発揮した安積朗十方の句碑。昭和48年５月５日建立。

表『年惜しむ　真如の月に　閉ざすなく　朗十方』

裏『昭和四十八年五月五日門人建之』

安積朗十方句碑

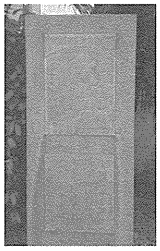
8　網干区

⑲河野鉄兜文学碑（元姫路市網干区余子浜　網干大橋袂）

網干地方史談会が建立した河野鉄兜作「播州を問うに答う」の文学碑。銅版画とともに建立され、横には説明札「河野鉄兜先生文学碑」もみられた。現在は網干中学校に移されている。

『吾郷山水本超凡
淡蕩煙波開鏡函
十里垂楊風不断
家々門外有春帆』

横説明礼『河野鉄兜先生文学碑
吾が郷の山水　もと凡を超ゆ
淡蕩たる煙波　鏡函を開く
十里の垂楊　風断えず
家々の門外　春帆あり



河野鉄兜文学碑

河野鉄兜先生文学碑
（写真は元の場所で撮影したもの）

鉄兜先生は文政八年（一八二五）網干に生まれる。播州林田藩々校敬業館の教授となり、最も詩文に長じ吉野の詠は芳山三絶として全国に名高い。門下に逸材多く昭和三年正五位を贈られる。この詩は「播州を問うに答う」と題す。（網干地方史談会）』

9　安富地区

⑳原田帰鳥塚句碑（姫路市安富町植木野　植木野墓地内）

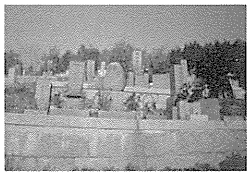
原田昭二家墓の横に建てられている句碑。安政４年（1857）思恩社中が建立。礎石には、若くして去った帰鳥を悼んだ漢詩が刻まれている。この句碑はかつて原田昭二家所有の山にあったが、のちにこの地に移された。

碑右『待たぬ日の　早きつ去りけり　来利鳥』

碑左『原田帰鳥塚』

礎石正面『嗚呼帰鳥去
　　雪月又花楓
　　唫咏交吾輩
　　墳前慕古風』

礎石右『造立　思恩社中』



原田帰鳥塚句碑

■編　集　　松　岡　秀　樹（姫路市文化財嘱託調査員）